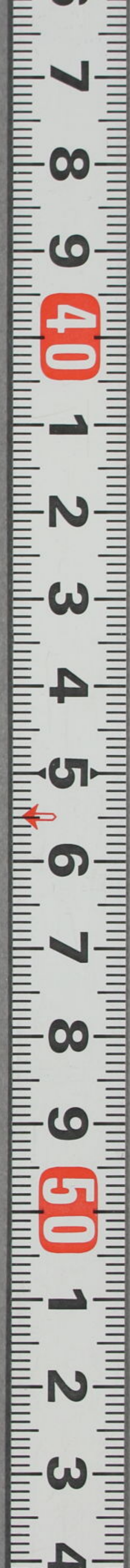




色草子約及每句と第

下

14
3157
20(2t)



14
3157
20
(2上)



色遣公翁登句系下

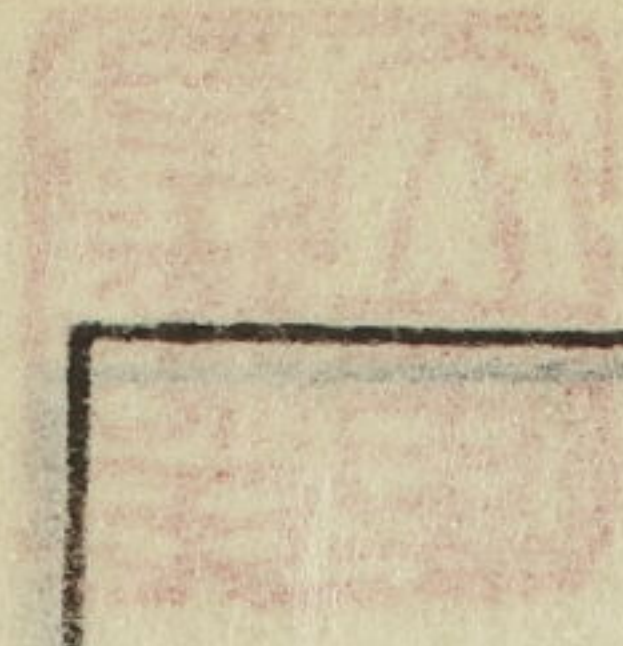
秋

初種や海をさす田の一みとら
まの妹やまをさす秋の夜半
父月や六日急事乃夜半の
意海や佐渡子掛ふ太の川
合款の本は急事乃星乃秋



素書の中七千余の七自れ秋七月
七の日にいふ事ふふ万葉の七種を記す
七種乃其木のも本や星也秋
又月七日の後風をきくにち白信
銀河の星をひきて高懸も楢板を
かろし一葉板をたぐ地二星も登飛
をくしるふくし一山河の事を記す
る水も星も楢板や岩の如く入
七夕や秋をささむるおももく也

下



かかえ乃圃をささむる
熊坂の木の事も以て其の鬼も
本なる塚も其電を奉所を
魂をけりたるも焼地の事も
尼事身も力はるるも
救るるも力も思ひそ玉まはるる
草の神やたして其のまもるるも
とある里もたつるも
たつるもたつるもたつるも
たつるもたつるもたつるも

ふとてうへく雷圍くくし一室の般耳
の書生のもてははのめあよるまはる
ふ髪ぬく花の下や壊壊
を田乃社まゝま盛の盤縁の
切をうへ

むさんやま甲の下みまうくす
床もみまうく斬ま入るやまをくは
情態やたつまあひく一草まをく入
空まをま小海まをま一草まをく入

下二

故襟まをまを秋まの葉まをく那

寄書下

拾つるまをまを圍の紙燭るま
このまをまを待まをまをく入
或者織の目まま禪大底のまをく入
いかなまあまはらまの人のまをく入
いねつるま海乃面まをまをく入
拾書や圍のまをく入五位まをく入

開きぬらむとて思ふに

あはれなる心

夢—と神は思ふに人の心は
牛部屋に牧の心は思ふに
ひやく—と神は思ふに人の心は
あはれなる心

秋す—と神は思ふに人の心は

金昌子にとて思ふに人の心は

あはれなる心

追分草子—庭の柳はあはれなる

あはれなる心

和角蓼登句

あはれなる心

あはれなる心

あはれなる心

あはれなる心

あはれなる心

あはれなる心

傍わさふ死かつかは乃松

嵐雪の画に漢をまらね

新影を下の好ましくなる事

括らるる人々廓かまは

とささるるあき

胡鳥を酒もさうらぬはうり

困閑の扱ひ

物へのやまを横たはる乃松

暮野や生息するわの友か

御影のまうり啼ゆ敷のよ

義をよや一夜をやせ山乃大

括らるるあき

女を二人たうりたる事

男はあつても変て物

ほの玉新得らるる遊女

来りしは昇まると男は

本

一うら遊女もゆかり花と月

小松とみよはく

志留の松とみよはく小松とみよはく松とみよはく

松水とみよはく松水とみよはく

ぬきとみよはく人よおとやるの松

畫襖

白松とみよはく松とみよはく松とみよはく

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

松とみよはく

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

深川店

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

西郷

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

松とみよはく松とみよはく松とみよはく

い〜〜と云々女阿久高〜〜
よ〜〜と云々白き結ゆ〜〜

蘭乃〜〜や蝶のつ〜〜
あぢら〜〜

門〜〜入ハ〜〜
本芳家のあ〜〜

人〜〜

ま〜〜く〜〜
ま〜〜く〜〜

夕影や秋らる色く秋孤の那

眼前

道のつた木撞と馬〜〜

花むくも〜〜

白鷺西師細川〜〜

薬園中〜〜

あ〜〜の〜〜

子猫の〜〜

あ〜〜の〜〜

ふも月や新白の夕きつふむん
河もきの見とくはも似るさの月
三日月より地も揺るる若る夏の雲
嵐蘭の暮きよ訪て

ふんや花の七日ききき此こり乃月
詠るや江戸みらまき丸山の月
俵くはぬ月寝さのほきささかしく
杜牧う早行の跡後小あか山よさ
くもさちまもささく

るよ海く跡さ後月きき一本のさ
月さや一本すあち雨を持ぬ
明木のや二十七夜も三日さ月
月乃らに酒さまんこさ持た
都の人さかた物ささささあ
さささささ思ひも業お無ささ
法統玉葉のなせしあさささ
あ乃中め新緑ききさささ月
文科山と八幡ささ里ささ

遠路往來能知ひき

月清一遊ちのりては砂乃く

種々殊也

月いつと清く志のめる海乃底

戸をひききら西よりあつ御座と

花ももよるにききもよる

花のまふ月もあはま一峰山

よき妻のりもあやうんんん

ふは日向守の妻おまをて席たのり

らんくすも今やう中野へ

月さひよぬちの妻乃けしん

跡のちや跡さうきく月さ

正秀亭初會

月代や孫子の成るる也

鑽ぬく月さ一入よは神堂

はあなをよるしや一たをよる

よるのち物もそ者んんん

はまの信をよるてありのよる

よしの水は信長をよきまのその時志

かひうらなれ

紫雲の月やそ結まうらまへ坊

ふとく瑞々道

梧桐のー乃やそ月の夕影うら

ぬ月おまのしんて色なき草花

昔年葉を種りて 毎ん 序忠月

深川のそあまねふ雪のそり

川よそそお川下や月乃友

下上

東酒き人お湖よよはれて東野よ
終まそわう

入月の流ち机の白隅の柳

月下に似てささるるの影はま

月すもや猶さうつぬ兒の佐

えの影やさこに行きうもそ月夜

月をきよ玉にけ草をうらぬ先

武蔵守素の仁おまをそ一は

額先とほらう

布衣葉新らふ下をさめく

粟稗子中しりくもつき叶の香

知是才今志の秋宅を焚す

とあやめや雀とほくぬ少戸の葉

まう未志や新糖の粒のち遠く

静火や石の末の雨粒赤く

周人戸牧事をさめく

苦う穂く舟又本粒あしり

接や命をかしむ 昔うはす

下田

遊女畫價

枝ぬりは日おしくかちぬ葉葉

旁面乃かをを葉葉れり葉

何とあそく小家と秋の柳を

秋海葉西風のとらぬ 笑み

鬼灯とて是も葉すうも葉

葉母とめく或坊母一おを

磁赤く我子園をを坊うす

猿引も猿の小袖をまめ

小枝を遠くまで年別を尋ね

抽きく扇引はく金波う那
相のすま 勢備 たる塚の肉
奪結目乃今やとれめと啼語

望田よそ

病を所おきまに落く旅路を
穡す免業の末畑や 迹 変
刈迄や子穡くくの野の
き乃名はまきとりて四半を

下

板の寒らる様をの相もや物あ
良よか家やまきくくくく
いと啼 志くおく出ー板の麻
接やまのおもひもら駒むら

言の候火とくもむとく

無火くくは麻や浪の下むき
穂まきもふゆく 聖か、の那
吹とまに石ま海る結野分
以上の破ををむく程風の吹くく

世にわたりてをば風をよみしは身こそ
通るにても通るにこそこの秋の風
徒をよみし人すそに秋の風いふ
いふの事盤う塚わく伊勢の古
うひもさるる秋の風いふは
いつも秋の風いふは身こそ
義朝のこゝろに秋の風いふは
秋の風や秋の風いふは身こそ
身こそいふは秋の風いふは

下十六

一笑退るる

塚もうこけしつゝ位もあきこれ風
いふと目もつらう秋の風
那谷もと寿石もはくは古松極
らうと秋の風いふは
石山もるるも白くあはつて
秋の風いふは
秋の風いふは
秋の風いふは

彦右社路 人の程をいふ中かき
己の長を記事する
ものいへて唇をきく 秋の風
志すの許より伊勢の記りせり
く我の妻をみたり

西東あそびの同し 秋の風

嵐園を悼

秋風や おもひ無き 秋の枝
入麩の下焼く 秋の枝

旅窓長夜 九月廿七ツウ
九夜起るも月が七ツウ

車庸亭二句

秋の夜をくち崩し 秋の枝
おもひなき 秋の枝

大木の玉井の内を

藤や 藤の葉はさくさく 藤の葉
菊花の枝

秋をゆく 藤の葉はさくさく 藤の葉

猶もよの姥もめでさし一筆おぼえ

大門通をさしつゝ

琴糸や古物店乃山守人の菊

行末本流の口より言ふそとて

さくらんぼ葉の縁でまじりぬ

蝶をさすく酔をさす菊の鈴が

休山をさす

新もちや菊の喜おす豆腐ト

八河如き

おとけ必笑や石屋の石巻同

危懸う長男乃心裁つ山家集

乃起りまらふ

一露路もく日さぬ菊巻氷の那

菊おきや庭をさすはるの履の石

妻ののちやさくらんぼの佛から

菊乃妻や土家良を後代の男が

園作を

妻のさすからんぼのさすの

しほむきさうり目さうり

菊のゆくさ良し秘波ちちる月如

園女家あて

白ら菊は月よりまきとるさきも如

後醍醐帝の清陵をおむ

清原直を狩て志のわら何ぞ忍ぶ

本言お掬うと世乃らん思ふを産む

翠山別墅

翁の居るくすの宮実子のと拾へる

秋風の吹くとききく 粟のいり

可休亭あて

祖父と親おのりお庭榊とん

里あて

里あてとく拵乃よもぬ家あて

志ぬ榊や一日とらふ積乃つら

菊乃ち後落とく拾へぬつられ

草うらやあふつらつら夕夕一と

松草やうらつらつら松乃形

秋風や相争く心そ苦み秋夜
見よせと御事なるとは遠く秋
輝かせぬりと空をさす吉の

田舎

送る事の送る果は秋の秋

種の廣く遠く

は到りて遠く子かちて遠く秋

空を水は相争ふ

秋の遠くは遠く小松川

秋懐

世秋は何と遠くさす

秋の遠くは遠く人そ

憶老杜

風聲を聴て秋秋す

秋の遠くは遠く

心よとひく秋

秋の遠くは遠く

枯枝子かちて遠く

東門の昔年の像のまじりか
かたがたのまじりか

あつちのまじりか

新思

け道やけ人形ふ秋のまじり
人まじりける帰るあまのまじり

清平のまじりか

松風乃秋を免くくまじり
行秋や身まじりか

七月のまじりか

鈴鹿のまじりか
新秋のまじりか
ゆくまじりか

冬

相葉のわらわら〜
舞いあそび

此海より草薙を採らん
よもやう〜大も〜
江戸もさき出さる

採んとわらわら〜
初時

下井

一尾根と〜
山株へ井も
初〜
つく志ら

草店

人〜
時ありや田の
時向の
宿の〜

るうらま志くく一財多乃大井河
くふそらま人もまよまきもらう種を
新葉の出そまそ早き一とれ哉
一 貞徳帝并矩かろれま
似る本誌をまらあま志をれら
初一くれ初乃字とわの財白う松
一 一とま進磁や津く小石川
まま進や月もいまらま虫乃吟

下

まあまらまこまら人せまら
金屏の松花古ひやまこま字
贈西堂御水の松を這まら田標
まららのまらまらまらまら牛
まら馬まま踏まらまら
雞波津や田標のぬまままらまら
先祝へ梅をまら乃ぬも張

千川亭

折く子伊吹をんくやまの鏡
当主のつらにあまの神の御座る
事月のみく免涼川の香草に
却出の神志藤原乃日敷の
清新傳や沖のやうに酒又升
菊鶴匠さのあーくく造新講
蛭子藤酢賣り袴着をんく
ぬり香の石衣形くまの講

文梁具口切乃日

口切乃塚乃庭をたりく
炉心くもや九友若く新美花
本くく結方を牛之由子似る

牛畫讀

あーくもや竹まのく
風や類をねくも人忠新
本新風子出吹くく

同新城表記格志の巻

京のあまきく世もくちやま信君
あな指理をこころし

美人のちの若きちく日あな舞川
とく乃山もあなく世本の世あな

平田明照の本もあなつうけつ
まなまはまら 二句

百年たふ京色をなほりあなまらう物
きよくくる。個やまらまらちくあな

道園居士のまらまらまらくく

まらあなまらまらまらまら
あなまらまらまらまらまら
あなまらまらまらまらまら
まらまらまらまら

そ乃くくまらまらまらまら
あなまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
あなまらまらまらまらまら

花のぬれ枯るゆゑをいふはあはれなる

之れをいふはあはれなる小坊主のあはれ

月日はあはれなるをいふはあはれなる

結ぶ

あはれなるをいふはあはれなる

十月八日 梅中吟

花の病をいふはあはれなる

川流やあはれなるをいふはあはれなる

あはれ耕を別墅

本より一に白ひやうき一ゆり花

をいふはあはれなる

熟田梅人其花をいふはあはれなる

水仙や白き清子乃やあはれなる

之の白き清子のあはれなる

拙先拙後と名をいふはあはれなる

花の白ひ拙なるをいふはあはれなる

菊乃後大根結介はあはれなる

鞍坪母小坊主乃や大根引

泉の子にもまゝあやふとく掻く見く
初まやさいまゝ店ぐー一ある
山中の子をたて遊ひて

まの雪に巻の皮乃 蟻作
南部まゝ

初ゆまやりの大佛乃まゝらま
揺り

まの巻まや雪山傍此後忠色
初まや扑かゝるまゝに揺るまゝ

まの雪や水巻の葉のまゝまゝ
おまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝ見まゝあゝまゝ

市人まゝまゝまゝまゝ
旅人まゝまゝ

馬まゝまゝまゝまゝ
衆人まゝまゝまゝまゝ

中まゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝ

せいのききおのりいんせいの井のんんん
 せいで老の後志賀の里にうらまはる
 とおのいまま津松をあらう智月と
 けふ若尼の許よりおとけふのねと
 がらおとけふのねとけふのねと
 おねの尼のしめや志賀の書
 湖水睡室
 比るにこよきさるもつとせの橋
 ついに中にも鳥をいさるのねと

小町画淡
 米とや雪うらの日雲を舞うと
 雲とて千深もとてむ位居らうと
 舟乃渡
 山画續
 海舟と雪をわらうと帯うね
 つと子たてとて玉あうと玉あうと
 自画自續

いのもろしきまきやまを乃り捨り
脂所の草を人々訪ひ
雲をよ細代の少魚共
雑炊り
雁さくくも
かゝ魅念
月花の
樽

茅舎買水

少苦く偃嵐の
すくも
瓶破り
こも
越人
まろれ
仙化
袖の

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

おぼろのぼろとくくくくくくくく

雁一ツ刀付くくくくくくくく
生ねくく一ツあぶる生海蔵外
くくくくくくくくくくくくくく

換回

遊のまぬ純物くくく七里中
ぬくけや鯛もくくの子まふ別
中備く様もぬくくくくくくく
納まきまきまきまきまきまき
そゆまきまきまきまきまきまき

昔も昔作を少佳のころふ出さうま
くれくく餅を本魂の徒傳れ
みぬも二千日に近し餅乃喜
煉掃やまけりさ者のさる新
議を遠くくやうま世に煉掃
行脚の五雲一具新彼子ゆい
くもをい路て路通をさうら
くは世乃煉掃一掃やめ古合子

旅行

煉掃も移の本乃雪如嵐く那
すくもささ己う棚つる大工外
月白を脚走を子路を掃さる
何く此歩を此市子めくく
かろをさる脚を此海のふつり
此市路も實に出るや
く此意さるく年乃定やん
洛神靈別當景樵丸興行
中も此神を友也やわく

雜

夕のうらみの健筆をそいで

世の中もとやまふ穢のやとらふ家

かくと争人圖

月花の古まやや涙跡あるしや

事あるうらむまを杖寒飯

すふ為難ちかうくさうるるる

よあひたうを杖つきはをるるる

船よこよは澄まの峰もけりあはれ
くくまぬ湯後よめくは枝の那

酒のこゝろ乃盛

月花もさくく酒のむらりや

或は形得ま

海りぬる由やさくさくまき身者

布袋の強襖

物かーや袋の中乃月と毒

